

「世界盆踊り連」活動報告書

2008年6月21日 ウクライナ、キエフ市の盆踊り

報告者：森戸 規子
家弓 重正

- 「盆踊り」の位置づけ：ウクライナ最大の民族の祭典であるクライナ・ムリィにおける
JICA プロジェクト ウクライナ日本センターの出し物の一つ
- 開催場所：ウクライナ、キエフ市内スピヴォチェポーレ公園内
JICA プロジェクト ウクライナ日本センター広場
- 日 時：2008年6月21日（土）
1200～1245 キエフ市内のヨーロッパ広場
（祭典開始前の人々の大行進の中間地点）
1500～1600 祭典会場のウクライナ日本センター広場
夕立のため開始は15分程遅れた
- 祭典主催者：クライナ・ムリィ（夢の国）フェスティバル実行委員会
委員長 オレグ・スクリプカ
- 盆踊り主催者：JICA プロジェクト ウクライナ・日本センター（UAJC）
所長 田宮 友恵

UAJC 広場では、野点・七夕短冊書きの体験コーナー、毛筆書き（漢字名提供）・獅子舞・居合抜き・盆踊りの実演、お好み焼き・ヨーヨーの販売など様々な方法で日本文化を紹介し、プロジェクトの広報をした。

- 盆踊り参加人数：演奏者（6名）、歌手（1名）、盆踊り中心メンバー（30名）
盆踊り実施中の観客＋参加者（最大時で、推定200～300人）
- 踊りの曲目：東京音頭、炭坑節、阿波踊り
- 「世界盆踊り連」の関わり・役割：
UAJC 勤務の森戸が UAJC およびキエフの大学で日本語を学ぶ学生約40人を集めて5月31日に「盆踊り隊」を結成。以後5回の練習日を設けて、浴衣の着付けと踊り方を教え、本番の踊りの進行を行った。踊り方は市販のDVDやビデオテープを参考にした。
家弓は本番5日前にキエフに入り、直前の2回の練習に参加して踊りの指導を行い、本

番では太鼓を叩きながら全体の進行を見守った。また家弓は、曲の伴奏を担当することになったウクライナ人バンドとの調整を行なった。

○「盆踊り隊」のメンバーと練習記録

メンバー：UAJCの日本語コースが宣伝ポスターを作成し、キエフ市内で日本語を学ぶ学生たちに「盆踊り隊」への参加を呼びかけた。UAJCの日本語講座受講者から20名、日本語を学ぶキエフ市内の大学の学生から20名メンバーを募集したところ、応募者が41名あったが、様々な理由で練習に出られない人たちがメンバーから離れ、練習3回目以降はUAJCからの22名、大学からの6名、その他1名の29名で定着し、最終メンバーとなった。

- 練習：1. 5月31日(土) 17:30~19:00 室内 (担当：森戸)
「盆踊り」というものの紹介(各地の盆踊りを見せる)
炭坑節と東京音頭の手足の動きの練習
阿波踊りのイメージ掴み
2. 6月7日(土) 17:30~19:00 室内 屋外 阿波踊りDVD使用 (担当：森戸)
炭坑節と東京音頭復習、阿波踊りのステップ練習
浴衣の着付け練習と各自の浴衣決め
3. 6月14日(土) 17:30~19:00 室内、屋外 阿波踊りDVD使用 (担当：森戸)
阿波踊りの練習(男踊りと女踊りの担当最終決定)
浴衣・ハッピー持ち帰り
4. 6月18日(水) 17:30~20:00 屋外 演奏家との合同練習 (担当：森戸、家弓)
盆踊り3曲の練習
阿波踊りの俄「連」作り、連のオリジナルダンス作成
5. 6月20日(金) 17:30~20:00 屋外 演奏家との合同練習 (担当：森戸、家弓)
浴衣・ハッピーを着てすべての盆踊り練習
当日の行動予定の確認、役割分担の決定

○ 当日の様子：写真を参照してください。練習風景と本番の写真があります。

○ キエフの盆踊りの特色

キエフで盆踊りを行うことになったきっかけは、2008年2月ごろUAJCの日本語コース運営担当の森戸が、ウクライナの民族の祭典であるクライナ・ムリィの際にUAJCコーナーで盆踊りをしたいとUAJCプロジェクト所長に働きかけたことに始まる。そのとき「世界盆踊り連」の存在を示した。所長は、プロジェクト2周年の行事としてUAJCコーナーの出し物を充実させるため、盆踊りの企画を受理した。家弓はプロジェクトからの協力要請を受けて、セネガルから応援に駆けつけた。

普通、盆踊りは地元の日本人会や日本センターが主催者なので、どのようにやるか凡その予想はつくが、今回はそうではなかった。今年で7回目となるウクライナ最大の民族の祭典「クライナ・ムリィ(夢の国)」に、UAJCプロジェクトが参加(前年から参加。今年は主催者側から協力の要請があった。)し、その祭典のプログラムの1つとして「盆踊り」が催されたのだ。この祭典は、特に音楽や歌などの入る催しには非常にこだわりのある祭典であるため、直前まで手順や方法の結論が出ず、やきもきした。こだわりとは、祭典内での音楽および歌のパフォーマンスは、すべて「生」で行なわなければならないことだ。たとえ「盆踊り」であっても、特に本番の祭典中に踊る場合は、演奏は必ず「生」で行なわれなければならないし、歌もその場で誰かが歌わなければいけない。音楽の原点に立ち返る意味ではすばらしいのだが、プロジェクトにとって演奏者を見つけるのは至難の業。ウクライナ、周辺国ヨーロッパなどから和楽器を演奏できる人、民謡が歌える人が呼べないかと探し回ったが見つからず、最終的に辿り着いたのがウクライナ人の演奏家をお願いするという方法だった。盆踊り実施経歴の長い家弓も、今までに経験したことが無い展開に戸惑った。

6月18日の踊りの練習で、1月前に盆踊りCDを渡して聞いてもらっていたバンドの人たちと顔合わせをした。彼らは平太鼓3つ、三味線もどき一棹、笛を持ってきたので一緒に練習してみたが、出す音が小さいしメロディーをオリジナルの曲と同じように弾くことが出来ない。このバンドだけでは到底踊れなかったが、かといって大太鼓が入ると、彼らの演奏はその音にかすんでしまうし、彼らは、自分たちは東洋の音楽を演奏できると自負している人たちなので、無視もできない。たいへんな出だしであった。

それから、2回の練習の合間に打ち合わせをして詳細を決めていった。祭典以前のヨーロッパ広場の盆踊りはCDを使うことに決めた。問題は祭り本番での踊りだが、阿波踊りはリズムだけ演奏すれば踊れるし、東京音頭もバンドの演奏でもどうにかメロディーが出来て踊れるようになったが、炭坑節だけはどうしても演奏だけでは踊れそうもなかったので、マイクとスピーカーを用意して日本人駐在員有志に歌ってもらうことで了解が取れた。有志の日本人歌手もウクライナ人のバンドも炭坑節を十分に知らないので、歌い出し合図を出したり、音楽の最後をバンドに伝えたりすることが家弓の仕事となった。

ここで大切だったことは、このウクライナのバンドを無視したりしないで彼らのやる気を引き起こすことが重要と最初に判断したことである。後で分かったことであるがバンドリーダーのコスチャンティン(下の写真で鉦を叩いている人)はドラマーでもありギターも弾き、かなりレベルの高い演奏家である。彼は私の太鼓の技量をみてそれに敬意を払ってくれたし、私も彼の技量に気づいたので、事がうまく運んだと思っている。



盆踊りの練習するバンド、右がリーダー



彼らの演奏に家弓が飛び入り 6月21日 1730～

3時から踊りが始まるという2時半ごろから空が暗くなり大雨が降ってきたので、センターのテントに避難したが、防水ではない布テントなので皆雨にぬれた。雨から大太鼓を守るためにかけた大きなビニールシートの下に盆踊り隊も含め家弓とウクライナバンドがいて、そのビニールの下で自然に演奏が始まった時は、彼らとの一体感を感じることができた。

幸運にも雨は3時15分ごろやんだので踊りを始めた。踊り始めると、輪の周りの見物人が増えてきてだんだんと中心に詰めてくるので、最後は太鼓の周りで踊るのがやっとなで、一生懸命練習した阿波踊りの3つのグループのフォーメーションの変化を見せることが出来なかった。東京音頭2回、炭坑節2回、阿波踊りを1回踊った。見物人も少し輪の中に入ってきたところで指定時間の4時になったので終了することになった。与えられた場所は狭いので大きな輪を作れなかったが、ウクライナで初めての盆踊りは当初予想された困難を乗り越えて、日本とウクライナの友好と親善に役立ったと思う。

踊りが終わっても、大太鼓の周りから人が去らないので、彼らに太鼓を叩いてもらったり、家弓が太鼓演奏をしたりして5時頃まで忙しかった。ウクライナ人は日本文化に関心を持っていることが理解できた。

29名の「盆踊り隊」メンバー達は、短い期間だったがものすごく集中して練習した。そして、かなり正確に動きを覚え、盆踊りが大好きになった。特に気に入ったのは調子のよい阿波踊りだったので、当日会場に向かう道でも、バスの中でも「ヤットサ〜」「ヤットヤット」の掛け声が絶えることはなかったし、ふと見ると踊っていない時も足が阿波踊りステップを踏んでいるメンバーも多く見られた。浴衣や法被を着てどっぷり東洋文化に浸かれたことに満足していたようだ。

家弓も森戸もこのような機会にめぐり合えて幸運であった。プロジェクト所長を始め関係者の皆さんに感謝する次第である。

以上